

## 第2 バチカン公会議と解放の神学に基づく世界の平和

山田 經三\*

### 概要

50年前に開催された「第2バチカン公会議」とその精神を南米において実現した「解放の神学」に基づいて、世界の平和を考察する。

「彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない」(イザヤ2の4)

これが世界平和の基礎である。

キーワード：カトリック教会、第2バチカン公会議、解放の神学、世界の平和

### I 第2バチカン公会議

ヨハネ23世教皇は、公会議召集にあたって、今までの内向きになりすぎていた教会の扉を世界に広く開き、風通しをよくし、よどんでしまっていた教会の体質を改めようと呼びかけた。このことが公会議を契機にカトリック教会が大いに変革され、新たな息吹きに満たされ、導かれて、全世界、全人類の抱える問題解決のために、持てる力、ダイナミズムを十分に発揮し始めた原因である。外に出向く姿勢に、すべての秘訣が集約されている。幸い、この公会議以来、カトリック教会は新たに歩み始めた。従来の教会の体質から脱皮し、「開かれた教会」、「対話の教会」、「貧しい人々の教会」として再出発し、その力を発揮し始めた。公会議の取り組みが教会内からの諸問題ではなく、教会外の全人類が直面している諸問題から出発したことに大きな原因がある。これらの諸問題を前にして、教会は自らの無力さを感じ、謙虚にならざるを得なかった。つまり、この公会議を契機に、従来の護教論的姿勢、上から下に演繹的に真理を述べるという権威主義的姿勢から、下から上に現代社会が抱えている具体的現実の問題から出発して他の多くの宗教、善意ある人々と協力し合って、真理を探究し続けるという謙虚な司牧的で協力的な態度へと教会は変わった。このことがのちに述べる解放の神学とつながることになる。

ここで今少し筆者自身の経験を踏まえて、この公会議の意義と新しさを述べさせていただく。筆者はこの頃神学生であった。学びながら疑問に思っていたことが、公会議によって新たな解答を得て嬉しかった。たとえば、森の中を歩いている時、その神秘的な雰囲気の中で「何ごとのおわしますかは知らねどもそのかたじけなさに 涙こぼるる」(西行)という心境で神を味わうと言うと、神学の教授から「それは汎神論、アニミズムだ」と言われ、寂しい思いをしたが、これでよいのだと分かったこと。筆者は子供の頃から家族で夕の祈りをしてしたが、祈りの本には

\* 上智大学 名誉教授  
連絡先 FAX : 03-5991-6928

「罪なかりしや」ばかりで心が暗くなり、いつも萎縮していた。しかし、公会議後、回心とはギリシャ語で「メタノイア」であり、後ろから読めば「愛のため」となることが分り喜びであった。告白で大切なことはまず神から大いに愛されていることを知り、「ありがとう」という感謝から始めること。にもかかわらず、おこたえするのが少なくて「すみません」と続き、今からまた頑張りますので「よろしく」で終わる。神の愛で始まり、神の愛に向かって前進するのが「ゆるしの秘跡」であり、日々の回心である。ことごとさように「発見」がたくさんあり、筆者にとって、第2バチカン公会議とは、実に喜びの訪れであった。

ところで、公会議は4つの憲章、9つの教令、3つの宣言から成る。『現代世界憲章』の冒頭には次の言葉がある。「現代人の喜びと希望、悲しみと苦しみ、とりわけ貧しい人々とすべて苦しんでいる人々のものは、キリストの弟子たちの喜びと希望、悲しみと苦しみでもある。真に人間的な事からで、キリストの弟子たちの心の中に反響を呼び起こさないものは一つもない。」これはまさに、のちに述べる解放の神学を準備させ評価するものとなった。

今一つ、『教会憲章』の冒頭を引用する。「教会はキリストにおけるいわば秘跡、すなわち神との親密な交わりと全人類一致のしるしであり、道具である。」教会を道具として位置づける謙虚さは、教会にとって実に画期的な言葉である。

ヨハネ・パウロ2世前教皇は、20世紀を顧みて神の最も大きな恵みは第2バチカン公会議であると述べ、回勅『2000年の到来』で次のように表現している。「新しい千年期のための最良の準備は、第2バチカン公会議の教えをできる限り忠実に個人と全教会の生活に適用すると改めて誓約することによってのみ可能になる」(3章20項)と。

## II 解放の神学

第2バチカン公会議の精神をラテン・アメリカにおいて実現しようとして、この大陸の司教代表は1968年コロンビアでメデジン会議を開催した。『メデジン文書』は次のように明言している。「我々はラテン・アメリカの教会が貧しい人々への福音宣教の担い手、彼らと共にある者。神の国の豊かさの価値の証人、我々の民衆すべての僕であるよう望む」と。

多くのラテン・アメリカの解放の神学者によって展開されてきたものが、公に認められただけでなく、他の第三世界、欧米の神学者たちの間でも各国の政治・経済・文化・社会状況に応じた神学的課題と取り組む新たな刺激となった。

神学者として世界的権威であるドイツのカール・ラーナーは死の直前(1984年3月)、バチカン教理省からの依頼で、解放の神学第一人者であるグスタボ・グティエレスの全著書を調査したあとに、遺書とも言うべき文書を残している。「私たちは、私たちの小市民的な裕福な環境からして解放の神学者たちを中傷してもよいのでしょうか。海の向こうのラテン・アメリカで解放の神学に対する判決は、現実には彼ら神学者たちに対する死刑判決でありうるのです。私たちは私たちの僅かな施しと立派な神学の勧告を第三世界に輸出してはならず、むしろ第三世界から学ぶべき時が来ているのです。」と。

解放の神学の分野では、アジアにおける権威であるスリランカのアロイジオ・ピエリス師(イエズス会)は、アジアにおける特徴を次のように述べている。「アジアの教会には、民衆の宗教性と貧困に対応して、一方に諸宗教との対話と文化内開花(インカルテュレーション)の神学、他方には解放の神学がある。この二つの課題を統合した『貧しい人々の宗教性』こそ重要なテーマである」と。

1986年3月、バチカン教理省から出された二番目の文書と教皇の手紙によって、解放の神学が第三世界のみならず、全世界にとっても重要な役割を果たすものであることが、今までにもまして明確に再確認されるに至った。前教皇の回勅『真の開発とは』もその一つである。このように

してラテン・アメリカ民衆の長期にわたる苦難とかれらとの連帯から生じてきた解放の神学の現実と本質が世界の多くの人々に正しく理解されるに至った。

解放の神学についての内容の説明に移る。以下の内容は1975年、『宗教学文献辞典』に執筆したものも含まれている。グスタボ・ラティエレスは著書『解放の神学』の序文で述べている。「本書は抑圧され搾取されている南米の地で、解放の過程に関わる人々のすべての体験と福音に基づいた考察の試みである」と。現代に横行する不正の状況を排除し、抑圧されている人々との連帯の意義を解き明かした書である。30年以上ペルー・リマのスラムのただ中で貧しい人々と共に生活した著者が、信徒が中心となって運営しているキリスト教基礎共同体（Basic Christian Community）を土台にして、神の愛を説こうとした自分が、逆に彼らから教えられたことを述べている。神を語る道は、神の国である正義と真理を証しする預言者の道であり、絶えざる感謝を捧げる祈りの道である。しかも、それは個人的作業ではなく、キリスト教基礎共同体のメンバーとしての共同作業である。

解放の神学の様式は3点に要約できる。(1) 抑圧的な現状を認識する。(2) その状況を抑圧されている人々の立場から見る。(3) 机上の神学ではなく、抑圧的な状況におかれている人々の視座、実践の現場から生まれる。

解放とは罪からの解放である。単なる個人の内面的罪だけでなく、社会的、政治的罪・不正・弾圧・差別・搾取からの解放である。しかもそれは、真理・正義・平和・愛に基づく、より人間らしい社会への解放である。解放は抑圧されている民衆の願いを表している。

### III 解放の神学は日本でどのように受けとめられたか？

筆者にとって印象的なことがあった。その一つは、解放の神学が話題になった当時（1986年）、東京大学を会場に、マルクス主義関係者の大きな集まりがあり、そちらに招かれて話をした。その直後1986年1月20日付毎日新聞の書評欄で、「解放の神学についてどれほど語っても、この日本に今生きている我々はその内実からますます遠く離れてしまうことになる」と高尾利数氏（法政大学神学部教授）は述べている。1986年1月17日の朝日ジャーナルの書評で山崎カヲル氏は述べている。「・・・Gグティエレス氏は、『解放の過程に参加することが、ある意味では、すでに救いの業なのである』と述べている。非キリスト教者であっても、解放の仕事へと身を差し出す人々は、すべてキリストの救いに関わると明言できる懐の深さには、正直言って、脱帽せざるを得ない。解放の神学はこうした点で、私たちの固定的なキリスト教理解を十分に異化してくれる。しかも自らを含めたどんな神学も『搾取されている社会階級との連帯』にはおよばないと断定しながら。この神学が目ざす「解放」の深みと、真剣に摺合せを行えないような解放思想はもう駄目であろう。それほど深刻な問題を、これら解放の神学の本は扱っている・・・」と。

今一つ筆者にとって印象的なことは、おもに被差別の問題を扱っている明石書店の石井昭男社長が解放の神学を正しく理解し、積極的に受け入れ、筆者を全国各地の被差別部落に案内し、指導者たちに紹介したことである。彼らは話し合いの結論として「差別した者を糾弾というやり方ではなく、この解放の神学こそ学ぶべき大切なことだ」と強調して下さった。

さらに印象的なことは、多くの新聞記者が解放の神学について取材に来られたことである。彼らは単なる取材だけでは満足せず、解放の神学を継続的に研究するようになった。その結果、一般の人々も含め解放の神学研究会を長く続けることになった。それを統合したものとして1980年、グティエレス師来日に際して、筆者は東京でシンポジウムを開催した。その場で種々の意見、質問が出された。たとえば「中流意識」の日本では「貧しい人々の最優先」は決め手に欠けるのではないか。高度産業社会の日本は世俗的・非宗教的な社会を現出している。「目標喪失社会」と言われる日本での問題は、むしろ豊かさの挑戦として受けとめなければならない。等々。「それでも

なおかつ貧しさからの挑戦である」と答え、グティエレス師は、聖書のよきサマリア人のたとえ（ルカ10の25～39）に触れて示唆した。「『私の隣人とは誰か』という自己中心の世界観から『私は誰の隣人になりうるか』という能動的姿勢への転換がキリスト教という回心である。キリスト者は自分の世界、自己中心の生き方から抜け出し、他者とくに貧しい人々のところに向向いていかねばならない」と。

#### IV 第2バチカン公会議はその後日本でどのように受け止められたか？

1987年、日本カトリック司教団は、第2バチカン公会議と同じ趣旨で、従来の歩みに対する深い反省を出発点として、第1回福音宣教推進全国会議を開催した。その開催に先立って次のように司教団は訴えた。「日本のカトリック教会の共通課題は、『信仰と生活の遊離』、『教会と社会の遊離』の克服になる」と。

2006年には、東京の真生会館において、この会議の成果を受け、そこで指摘された課題は、今もなお日本の教会の大きな課題として残されていると判断し、学び合いコースが企画された。この講座に招かれ「第2バチカン公会議、その時・・・『現代世界憲章』のこころ」と題して講演を行った（この同じ題で、のちに出版された。）。

ここで述べたことの一部は次のようなことであった。生活から遊離した信仰、現代社会から遊離した教会のあり方を改め、どこか遠くからのものを受け継ぐ教えではなく、現実の生活に根差し密着したところに生み出されている信仰を持つことが大切である。このような信仰に基づく実践とは、3つの柱からなっている。(1) 苦しむ人々の側に立ってその声となる。(2) 社会の良心となる。(3) 人権、正義、愛に基づく新しい社会をつくる。ここにこそ、社会の価値転換の力の原点がある。この原点を大切に自らの生活、仕事、社会の真ただ中であって、すでに得ている宝を再確認し、さらに再発見する時はじめて社会が求めている活性のちから、ダイナミズムが生み出されるであろう。

現代世界憲章は「結語」として、「すべての人との対話」を促している。筆者はこの意を受けて、故白柳誠一枢機卿と共に長年「世界宗教者平和会議」に参加し、多くの宗教の方々々と交わり、対話し、世界平和を目指して協力し合っている。毎月、平和研究所で研究している。その間、多くの方々から豊かな内容を学ぶことができた。それぞれの違った宗教の方々が真剣に仏様神様を求め、礼拝し、感謝し、その信仰に基づいて誠実に生活しておられることはすばらしいことで、感謝いっぱいである。それでは「福音宣教はどうなるのか？」と言われる人もいる。ご心配なく。福音宣教の根本は愛。神を愛し、人間同士互いに愛し合うことである。この点において、私たちは互いに他の宗教から実に多くのことを学び、互いに愛が豊かになる。福音宣教の熱意もいっそう強くなる。ここに第2バチカン公会議に基づくならば、世界宗教者平和会議も教会一致運動（エキュメニズム）も意義がある。

この点に関して、筆者の経験から言えることだが、日本そしてアジアこそ世界に発信していく大切な役割がある。従来、中東その他の地域、国々では一神教の間で、あるいはキリスト教内の対立の長い歴史があり、反面、日本、アジアでは互いを受け入れあい、尊重し合う風土、寛容さがある。アメリカで行われた国際経営倫理学会の最後に、メッセージを依頼されたので次のように述べた。キング牧師を引用して、私には夢があると言い、日本を紹介した。「Japan = Justice for All, Peace for All, Nation」つまり世界人類すべての人に正義があるように、一人ひとりが人間としてふさわしく扱われるように、そしてすべての人々に平和があるように。そのために貢献する国であるように。これを目指して皆さまと共に協力し合っていきたい」と。

## V 世界平和をめざして

今まで述べてきたことを踏まえ、結論として世界の平和をまとめとして述べる。平和は、人と人とがふれあい、助け合い理解し合うことによって深められていく。それぞれの立場で、それぞれの可能な分野で国際交流をはかり、平和な世界の実現のために貢献していきたい。世界の平和は福音の光に基づいた愛と真理と正義と自由の調和の上に築かれるものである。このことを伝え、広め、すべての善意ある人々と手を取り合って世界平和の実現に向かって、歩んでいきたい。イザヤ預言者は述べている。「かれらはその剣を鋤に打ちかえ、その槍を鎌に打ちかえる。国は国に向かって剣を上げず、戦争のことを再び学ばない」(2の4)

教皇ヨハネ・パウロ2世は、1981年2月25日、広島で「平和のアピール」を行った。「戦争は人間のしわざです。戦争は人間の生命の破壊です。戦争は死です。この広島の町、この平和祈念堂ほど強烈に、この真理を世界に訴えている場所はほかにありません。もはや切っても切れない対をなしている二つの町、広島と長崎は、「人間は信じられないほどの破壊ができる」ということの証として、存在する悲運を担った、類のない町です。この2つの町は、「戦争こそ、平和な世界をつくらうとする人間の努力を、いっさい無にする」と、将来の世代に向かって警告しつづける、現代にまたとない町として、永久にその名をとどめることでしょう。・・・過去をふり返ることは将来に対する責任を担うことです。広島を考えることは、核戦争を拒否することです。平和に対しての責任をとることです。この町の人々の苦しみを思い返すことは、人間への信頼の回復、人間の善の行為の能力、人間の正義に関する自由な選択、廃墟を新たな出発点に転換する人間の決意を信じることに繋がります・・・」

最後に、聖書の言葉を引用して結びとしたい。「実に、キリストは私たちの平和であります。二つのものを一つにし、ご自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、規則と戒律づくめの律法を廃棄しました。こうしてキリストは、双方をご自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、十字架を通じて、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を減ぼされました。キリストはおいでになり、遠く離れているあなたがたにも、また近くにいる人々にも、平和の福音を告げ知らせられました。」(エフェソ2の14～17)「だから、邪悪な日によく抵抗し、すべてを成し遂げて、しっかりと立つことができるように、神の武具を身に着けなさい。立って、真理を帯として腰に締め、正義を胸当てとして着け、平和の福音を告げる準備を履物としなさい。なおその上に、信仰を盾として取りなさい。それによって、悪い者の放つ火の矢をことごとく消すことができるのです。また、救いを兜としてかぶり、霊の剣、すなわち神の言葉を取りなさい。」(エフェソ6の13～17)